

(2023年) 令和5年1月29日

濱名 均

★「現代語訳 論語と算盤」(ちくま新書) P203を中心に、感想を述べてみます。

渋沢栄一は論語と算盤の随所で、徳川家康を賞賛している。そして徳川260年の治世は、家康公の「論語」の教え(孔子の教え)によるものであると述べている。P203では、その視点から見ると明治に導入した教育は、「あいつも俺も、同じ人間じゃないか。あいつと同じ教育を受けた以上、あいつがやれることくらい俺にもできるさ」という風潮であったと述べている。

① 「司馬遼太郎(濱名が大好きな作家であるが)は、**世襲、情報の閉鎖性、安定の三点**がそろそろ日本型共同体の権化として、家康と徳川家を描いていた」と、国際日本文化研究センターの磯田道史教授(日本史学)は指摘している。

これについての濱名の見解を述べるとしよう。「**情報の閉鎖性**」には異論はない。「民は之を由(よ)らしむべし之を知らしむべからず」という論語の一節がある。封建時代の政治原理のひとつとされている。司馬遼太郎もこの見方に賛同したのであろう。欧米の場合はディスカッションをして、差異を明確にしていく過程の中で共通の目標とする価値を探し求めていくという、いわゆる民主主義の方法を取っていく。

いつ頃からこのような流儀が主流になったのか?興味のあるところである。江戸の元禄時代の赤穂事件の場合には一大事であった。その中で城代家老大石内蔵助は議論を尽くさせて赤穂藩の藩士の身の振り方を選択させた。稀有なリーダーであったと思う。ここには情報の閉鎖性はない。またこの事件を奇貨として林羅山は朱子学(君臣関係・忠義や家族関係・孝行を秩序づけていく)をより一層徳川幕藩体制にビルトインしていった。

現代の日本の出来事では昨年12月に「国家安全保障戦略」「国家防衛戦略」「防衛力整備計画」の安全保障関連3文書が閣議決定という場で行われた。時の政権(政府)は国民にこの情報や迫られている決定事項を開示していく時間がなかったのか?それともその議論をする能力を国民が持ち得ていないと判断したのか?真相は想像の域をでない。

しかしながらいずれにせよ「民は之を由(よ)らしむべし之を知らしむべからず」という原理が横行していたと言い得るものである。それを民の側から見ると「長いものには巻かれよ」という処世術として横行している。長い間世界動向や国家の安全保障という議論をしてこなかった「国民のツケ」がこの時点で集約的に現れたと解釈している。一般的に言われてきた「宗教と政治の話しはしない」という我が国世間でのルールであった。この「国民のツケ」は今後の我々自身に降りかかってくるものである。

江戸時代が、**世襲制度**と身分制度で極めて**安定した世の中**を創出してきたことも事実であったと思う。秀吉の刀狩以来、兵農分離で世の中が安定してきた。平和という視点からは大きな功績であった。江戸時代には、五人組という相互監視社会も同時に導入されている。このことは個人の行動の「自由」よりも連帯責任や治安維持を優先する思想を形成していったと思われる。この横同士の連帯性や相互監視の風潮は、現代の大企業病という問題にも、その影響が受け継がれているという意見も世間にはある。**世襲制度**は心理的な影響として現代の政治家の出世競争と神輿担ぎにも色濃く現れていると言え得る。

しかしこの世襲制度は日本だけの問題ではなく、全世界的に見られる現象なので必ずしも「日本型共同体の権化」と言い切れないところがあると思う。自由・平等・博愛を旗印にしている西欧諸国にしても、世襲構造は日本を遥かに上回るものを持っているのも事実である。「法の下での平等」であって経済的な平等思想ではないのではないか。

「**安定した世の中**」ということ現代の人々は考えなければいけない。食糧やエネルギーといった安全・安定も当然あるでしょう。ここでは少し角度を変えて考えてみる。移民の問題が昨今の世界的な問題となっている。EUの様子に単一経済圏を築くことによる移民の問題がある。日本では少子高齢化と経済発展によって出稼ぎ労働者の移民問題がある。これからの大きな問題になるでしょう。米国でも移民の問題は大きな課題である。それに拍車をかけているのが難民の問題である。一言で言うと「スクランブル」状態である。これを是とするのか非とするのか。あるいは所与のものとするのかである。

② 「司馬遼太郎は敗戦を経験した陸軍で、正しい情報が閉じ込めがちな日本人をみた。それが日本の大きな間違えだったと考えたとき、遠因を徳川長期政権に求めた」と、磯田教授は語っている。

しかしながら、小生（濱名）は敗戦を経験した陸軍で、**最も想像すべき組織的欠陥の原因は、渋沢栄一が指摘した「あいつも俺も、同じ人間じゃないか。あいつと同じ教育を受けた以上、あいつがやれることくらい俺にもできるさ」**という風潮をもたらした明治時代の教育にあったと考えている。欧米から導入された教育が、欧米では南北戦争やフランス革命などの多くの血を伴った「市民革命」を経て獲得されたものであった。そこには歴然とした階級社会も併存していたのであった。日本では市民革命的な素地が無い状態で導入されたからではなかったのかと考えている。（後述する）

幕末から明治維新にかけて「権利意識」が庶民にはあまりなかったのか？それとも対立すべき「経済的な階層」がなかったのか？小生はその双方であると思う。だから革命は起こらなかった。権利意識が薄いのは仏教の影響と思われる（「足るを知る」である）。江戸時代は神道・仏教共存の時代であった。経済階層もなかったと言えよう。皇帝・貴族と農奴の関係

(ロシア帝国)や資本家・新興ブルジョワジーと封建貴族・奴隷を使った農園経済構造との対立(アメリカの南北戦争の下地)、というような経済的階級・階層の緊張・対立は江戸時代にはなかったのである。士農工商の身分制度はあったものの地方分権的な「藩」が経済単位として君臨していたのである。

明治の特徴は士農工商の身分制度から解放された人々のエネルギーのみを頼りにしていた。そこでは「支配階層が持つべき、克己心や真の教養」というものがなおざりにされていた。欧米で言えば「ノブレス・オブリージュ(高貴たるものの義務)である。福沢諭吉は「学問ノススメ」を著してこの解放されたエネルギーを盛んにバックアップした。この明治初期段階の「光と陰」がその後の明治・大正・昭和初頭へと引き継がれていったと解釈している。教育界では学歴と知識のみが強調されていった(これは渋沢栄一が「論語と算盤」でも激しく心配していたことであった)。

江戸時代の武士階級は支配階級であったが、その子弟は克己心や真の教養で心を磨き、武道で胆力を鍛えた。庄屋階級や富裕な農民層はこの「武士道精神」というものに憧れ見習い、論語を読み、剣術を行っていた。渋沢栄一もそんな中の一人として少年時代・青年時代を過ごしてきた。濱名はそんな渋沢栄一の中に武士道精神を見ているのである。

新生の明治時代は多くの庶民が陸軍士官学校や海軍兵学校に進んでいた。それは解放されたエネルギーと「学問ノススメ」という同様の風潮の下、軍人として出世していった。

明治の教育導入は技術導入が先行されて、マス教育としては精神的な陶冶や人格的な陶冶と自己抑制の教育がないがしろにされた。その結果、富国強兵を標榜した日本国ではあったが、陸軍では「参謀」クラスが上記の考え・思いで戦場を指揮していったのではなかろうか?と想像する。それが大東亜戦争・太平洋戦争の現場での戦略や戦術に反映されたと考える。

このような(悪しき?)風潮が、「あいつも俺も、同じ人間じゃないか。あいつと同じ教育を受けた以上、あいつがやれることくらい俺にもできるさ」ということであったと言える。すでに渋沢栄一がみた明治の時代にすでに始まっていたということである。濱名はこの思想・風潮は現代でも日本の企業などの行動・戦略にも多く見ることができると考えている。

③ 日本は太平洋戦争の敗戦後にはアメリカ直輸入の「民主主義」を導入し、それを「善・良し」として戦後復興に励んできたのであった。もちろん見様見真似の民主主義であった。それは今日まで続いていると言える。しかしながら日本にも「民主主義の本当の意味でのスタディのチャンス」はあった。世界的な1968年の若者を中心としたムーブメント(アメリカではベトナム反戦とピッピー文化、学生運動である)

と同時に、日本でも起こった。しかし時の政府とそれを支える知識層・インテリゲンチヤーにそれを「真の自由主義と民主主義のスタディ」に転化・昇華させる胆力と知恵が存在しな

かったのである。今日の「世界の中の日本の舵取り」の迷走の原因はここにもある。この認識なき「世界の中の日本の舵取り」という「掛け声」は、ほとんど自己満足的なものに終始している。

江戸時代の窮屈な身分制度から解放された「人的なエネルギー」が、近代国家日本を作り上げていったのも事実ではあるが、同時に軍事（陸軍・海軍）に本当に必要な「頭脳と胆力」を組織的にマスとして育てていくことまでには及ばなかったのではなかろうか。

近代明治の「光と影」として、「教育」についても、正しく把握し直すことが、現代の今日の「世界の中の日本」を考え、かじ取りを行う際に必要なことであると思う。司馬遼太郎の代表作品の一つである「坂の上の雲」は、我が国の輝ける「光」の明治近代の一側面ではあるが、明治の「影」の部分把握もまた必要であろう。その意味で、「澁澤栄一とその時代」を多くの側面から研究することは「現代と未来への懸け橋」と成りえると思う次第である。

約2年間の（100歳総研澁澤栄一分科会での）研究会・読書会を経てきた訳ですから、次のステップとして「澁澤栄一から始める研究会」というのが、澁澤栄一翁の真に望まれたことではなかったのか。

単なる澁澤栄一の生涯を研究して「回顧主義」にふけるだけでは、戦後の民主主義教育の恩恵に浴してきた我々の栄一に対する恩返しとしては不十分と思う次第である。

澁澤栄一研究会・座長 濱名均